

アメリカ合衆国の地域区分 ——高等学校の地誌教科書を比較して——

溝 口 晃 之 *

I はじめに

高等学校の教育課程は昭和57年度入学生から学年進行で大幅に改訂されることになった。社会科もその例外にもれず、新しく現代社会が第1学年に必須科目として履習されることになった。その他、日本史、世界史、地理、倫理、政治・経済の5科目が第2学年以降の選択科目となった。地理については、従来地理A（系統地理）と地理B（世界地誌）に分かれていたものが、世界地誌をとり入れながら、系統地理を中心に一本化された。一本化されたとはいっても、系統地理と地誌とは車の両輪のようなもので、どちらか一方だけの学習では不十分である。従って、新課程の地理を学習する場合にも授業の補習や家庭学習などで世界地誌の学習をすることは不可欠であるといえる。この考えに立って、筆者らは新課程の地理を学習する者を対象とした高校生用の地理用語問題集¹⁾を編集した際に地誌の扱いにも十分に考慮した。

ところで、地誌を扱う場合には様々の扱い方がなされている。旧課程の世界地誌の教科書を検討してみると、アメリカ合衆国・オーストラリア・ソ連・中国などの大国については一国として独立して扱い、小国についてはいくつかの国々と合わせて扱っている。さらに大国については、自然環境・歴史的背景・住民・産業などを概観した後で地域区分をしたものがある。国あるいは地域をいくつかの小地域に区分して、各々の地域の特色を

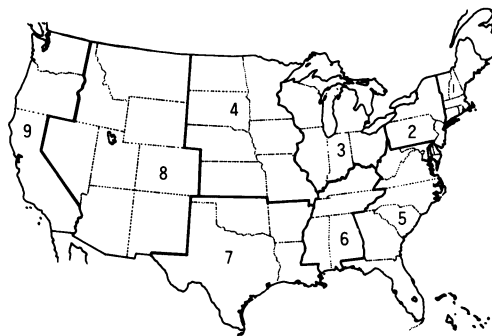
学習することは、地域区分の方法という地理の本質ともかかわる重要な問題を含んでいるので、大変意義のあることである。ここでは、各地方誌の扱いがされていることの多いアメリカ合衆国の地域区分について検討を加えてみることにする。

II アメリカ合衆国の地域区分例

アメリカ合衆国は、アラスカ州とハワイ州を除いた本土48州でも、南北の緯度差約23度、東西の経度差約60度という広大な国土である。地形的には五大湖周辺の安定陸地、東部の古期造山帯、西部の新期造山帯の3地区に分けられるし、気候的にもフロリダ半島先端のサバナ気候から五大湖周辺の亜寒帯気候・ロッキー山脈沿いの高山気候まで様々な気候区が存在する。また、農業も自然環境の南北性・東西性や市場との距離などを反映して大きな地域差がある。ところが、地域区分となると多くの指標をとり入れなければならないので、教科書によっては自然環境と農業や工業についてそれぞれ各地方の特色を記述し、改めて地域区分をしていないものもある。

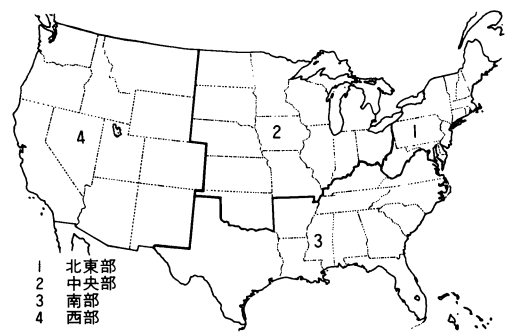
図1はアメリカ合衆国連邦政府が統計区域として区分しているものである。図2～図5は現在発行されている地誌教科書のうちで、アメリカ合衆国の地域区分をとり上げているものである。本土48州についてみると、図1は9地域、図2（A社）は5地域、図3（B社）は3地域、図4（C社）は4地域、図5（D社）は5地域にそれぞれ区分されている。

* 愛知県立一宮興道高等学校教諭



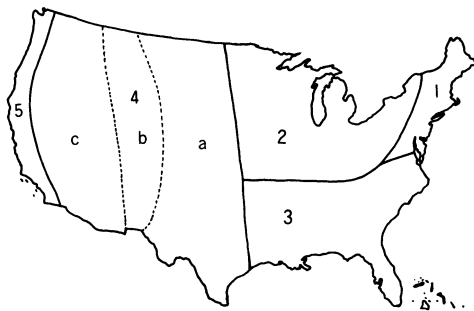
- | | |
|-------------|--------|
| 1 ニューイングランド | 6 南東中央 |
| 2 中部大西洋 | 7 南西中央 |
| 3 北東中央 | 8 山岳 |
| 4 北西中央 | 9 太平洋 |
| 5 南大西洋 | |

図1 連邦政府による地域区分図



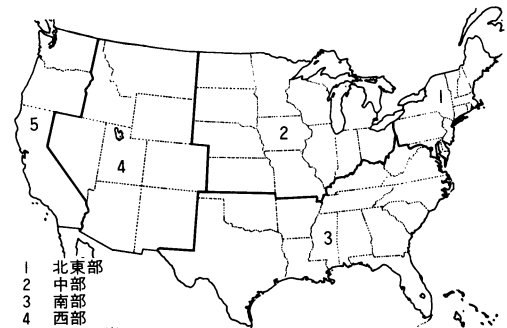
- | |
|-------|
| 1 北東部 |
| 2 中央部 |
| 3 南部 |
| 4 西部 |

図4 C社による地域区分図



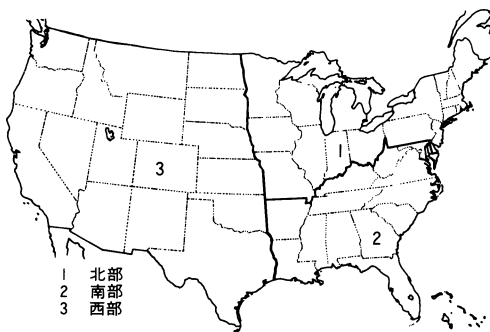
- | | |
|---------------|---------------|
| 1 アメリカ＝メガロポリス | 4 西部 |
| 2 中西部 | a グレートプレーンズ |
| 3 南部 | b ロッキー山脈 |
| | c 西部盆地群地域 |
| | 5 アメリカ太平洋沿岸地域 |

図2 A社による地域区分図



- | |
|--------|
| 1 北東部 |
| 2 中部 |
| 3 南部 |
| 4 西部 |
| 5 太平洋岸 |

図5 D社による地域区分図



- | |
|------|
| 1 北部 |
| 2 南部 |
| 3 西部 |

図3 B社による地域区分図

(1) A社による地域区分

図2は州境界線にとらわれることなく区分線を入れていることが最大の特徴である。このため、アメリカ太平洋沿岸地域が他の区分図よりも海岸沿いに限られていたり、農業地域と牧畜地域との境界線となる西経100度の経線（ほぼ年降水量500mmの等降水量線と一致）に沿って区分線が入っている。さらに、アメリカ＝メガロポリスという都市に視点をあてた区分を行なっていることや、西部を細かく西部盆地群地域・ロッキー山脈・グレートプレーンズに3区分していることが特色である。

(2) B社による地域区分

図3は3区分しているだけであるので、それぞれの地域が相当広く、地域差が大きいところを一つの地域として扱うことには少なからぬ困難がある。西部の山岳地帯と太平洋岸地域を同一地域として扱っているが、西部が東部に比して新しく開拓された地域であり、その境界線がフロンティアラインであるという観点に立てば、この区分も意味をもつ。しかし、北部地方の記述の中で、ニューイングランド地方・中部大西洋沿岸地方・五大湖地方に分けていることには工夫のあとがみられる。

(3) C社による地域区分

図4は藤岡・西村・浮田・服部²⁾(1977)の地域区分にもとり入れられているが、図3と同様に西部の区分に問題がある。

(4) D社による地域区分

図5は区分された地域の数が5地域で、農業・工業の両方の特色に最もよく合致している。細かく区分すればするほど等質性が高められるが、各地方誌に配当できる時間数を考えると、5地域ぐらいが妥当であろう。筆者も授業ではこの方法を用いている。

III まとめ

地域区分は指標のとり方や個人差などによって種々のものが考えられる。前述の数社の教科書によってもかなりの差異がある。農業や工業などの産業をとらえるときには、結節地域の考え方に立つものよりは等質地域の考え方に立ったものの方がよいし、都市や交通などを扱うときには、結節地域の概念を導入する必要がある。大切なことは、地域区分は固定的なものではなく、使用目的に応じて最も適した地域区分を行なうことである。

この小論を榊原康男先生の御退官に際して献呈いたします。榊原先生は小生が大学卒業後に赴任されたため、教室での直接の教えをいただいた機会はなかったが、高等学校の地理教育について個人的に少なからぬ御教示をいただいた。

註

- 1) 高橋睦人・安盛義高・溝口晃之(1982):『一問一答 地理用語問題集』。山川出版社。
- 2) 藤岡謙二郎・西村睦男・浮田典良・服部昌之(1977):『世界地誌』。大明堂。